

メッセージアウトライン 創世記46:1～30「父との再会」

ヤコブは息子たちによってヨセフがエジプトで生きており、しかもエジプトでファラオに次ぐ第二の権力者になっており、父とその一族全員をエジプトで養うので、エジプトに下って来るようにとの知らせを聞いた。また、ヨセフが父を乗せるために送ってくれた車を見た。それでヤコブは元気づいてヨセフに会いに行こうとして、エジプト行きを決心する。

[1]「イスラエルは彼に属するものすべてと一緒に旅立った。そしてベエル・シェバにきたとき、父イサクの神にいけにえを献げた」

「イスラエル」この名前が使われているのはヤコブという名前に見られる個人的、肉的な面を越えて神の契約の民としての面を強調しているからである。

「ベエル・シェバ」それまでイスラエルはカナンの地のヘブロンに住んでいた。(35:27,37:1) ヘブロンはエルサレムの南約40キロメートルの地。ベエル・シェバはヘブロンからさらに南西に約40キロメートル下ったところにある。ここはかつて父イサクが住んでいたところである。(26:23~33) この地はエジプトに下る道筋にある。イスラエルはそこで父イサクの神にいけにえを献げて礼拝をした。これは父イサクそして祖父アブラハムと契約を結ばれ、今また自分を導いてくださる神を礼拝し、エジプトに下ることが神のみこころか最終的に確認するためでもあったであろう。アブラハムは飢饉のときにエジプトへ行って失敗している。(12:10~20) イサクもエジプト行きを禁じられている。(26:2)

[2] 神は夜の幻の中でヤコブを呼ばれた。旧約時代はしばしばこのような方法で神は語られた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

[3] 神はエジプトに下ることを禁じるのではなく、恐れずに行くように、そして「わたしはそこで、あなたを大いなる国民とする」と言われた。

[4] さらに、神ご自身が彼とともにいっしょに下ってくださると言われる。「また、このわたしが必ずあなたを再び連れ上る」これはヤコブをもう一度カナンの地へ連れ戻すというのではなく、彼の子孫、契約の民としてのイスラエルを導き上るということであり、このことは出エジプトの時に実現する。

「ヨセフはあなたの目を閉じてくれるであろう」これはヤコブがヨセフの見守りと世話のもとで平安のうちに死ぬということを示している。

[5]「ヤコブはベエル・シェバを出発した。イスラエルの息子たちは、ヤコブを乗せるためにファラオが送った車に、父ヤコブと自分の子どもたちや妻たちを乗せた」

神からの語りかけによって疑いと恐れを取り払われたヤコブは確信をもってベエル・シェバを立ってエジプトへ向かう。

[6-7]「そして、家畜とカナンの地で得た財産を携えて、ヤコブとそのすべての子

孫は、一緒にエジプトにやって来た。彼は、自分の息子と孫、娘と孫娘、すなわちすべての子孫を、一緒にエジプトに連れて来た」

ここでは道中の出来事は一切省かれ、すでにヤコブの一族がエジプトに来たということが記されている。

[8-27] 8から27節まではエジプトに来たイスラエル（ヤコブ）とその子どもたちのリストである。しかし、このリストをよく見ると、すでにカナンで死んでいる者やエジプトに移ってから生まれた者がいるのがわかる。つまり、ここにかかっているすべての者がその足でカナンから歩いてエジプトに入ったということの意味していない。12節では「エルとオナンはカナンで死んだ」と書かれているし同じ12節のペレツはエジプトへ行った頃はまだほんの子どもであったと考えられるのに、ここではすでに二人の子（ヘツロンとハムル）を持つ者として記されている。

また21節でヤコブの末子ベニヤミンがすでに十人の子を持つ者として名があげられているのも不自然である。民数記26：40ではこの十人のうちナアマンとアルデは孫として出てくる。

このようなことから考えるとこのリストは孫であってもやがて国民としてのイスラエルの母体となる部族の構成につながる者、またやがて戻ってくるカナンでの相続権を示す一種の権利書的な要素を持つものであると思われる。15,18,22,25節に書かれている数字を足すと七十人になる。しかし、数に入っていない娘のディナ(15)を加え、すでに死んでいるエルとオナン(12)とすでにエジプトにいたヨセフとその子マナセとエフライムを引くと26節の六十六人となる。27節はこれにヨセフの二人の子とヨセフ自身と最後に父親のヤコブを加えて七十人という数字となっている。しかし、それぞれの妻たちや使用人たちを含めると実際にはもっとたくさんの人数がいたと考えられるので、それを七十人と限定しているのは、完全数と言われる七をさらに十倍したものとして、ヤコブの全家族がエジプトへ行ったことにおける神のご計画の完全性を表しているのではないかと考えられる。マタイの福音書1章の系図などを見ても、しばしばこのような切りの良い数字合わせがなされていることがある。

[28] 「さて、ヤコブはユダを先にヨセフのところに遣わして、ゴシェンへの道を教えてもらった。そうして彼らは、ゴシェンの地にやって来た」

「ゴシェン」ナイル川河口の東部にあったと思われる牧草の豊かな地。ヤコブがユダを選んだのはベニヤミンをエジプトへ連れて行く時の出来事や、ヨセフに対する必死のとりなしで父が十分信頼できる者として認めたからであろう。家族の中でユダの存在は重みを増していた。

[29] 「ヨセフは車を整え、父イスラエルを迎えにゴシェンへ上った。そして父に会うなり、父の首に抱きつき、首にすがって泣き続けた」

ヨセフも車を整えて、父を迎えるためにゴシェンへ上った。もちろんエジプトの第二の権力者として威厳をもって、また多くの部下も連れて行ったのであろう。しかし、そのような外面も父ヤコブの前に出た時にはすべて取り払われ、長い間会うことのできなかつたなつかしい父とその子として人目もはばからずに父の首に抱きつき、その首にすがって泣き続けたのであった。ヨセフはエジプトで奴隷として売られてからの苦しみ、悲しみ、絶望、そして忍耐の日々を思い出し、そしてついに父に会うことのできた嬉しさに感情が一度にあふれ出して、自制しようとしてもしきれず、感情のままに泣き続けたのであろう。感動的な再会の場面である。

[30]「イスラエルはヨセフに言った。『もう今、私は死んでもよい。おまえがまだ生きていて、そのおまえの顔を見たのだから。』」

イスラエルすなわちヤコブはかつてヨセフが死んだと思った時には「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい」(37:35)と言って泣いた。またヨセフの弟ベニヤミンを兄たちがエジプトに連れて行かなければならないと申し出た時にも、「もし彼にわざわざ降りかかれば、おまえたちは、この白髪頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ」(42:38)と言って、自分が死んでしまうことを悲観的に語った。しかし、この30節では同じ死のことを語るにしても、死んだと思っていたヨセフに再び会えたという感動と幸福から、もう死んでもよいと明るい満足をもって語ることができたのであった。

死んだと思っていた息子ヨセフとの再会はヤコブの今までの悲しみを十分補うものであり、喜びと幸福感を満たすものとなったであろう。しかも今やヨセフは大国エジプトで飛ぶ鳥を落とす勢いの権力者となっているのである。

ヤコブは兄エサウのかかをつかんで母の胎から出て来た者であった。(25:26)そして彼はやがて兄の長子の権を奪い、また父と兄を欺いて長子が受けるべき神の祝福をも手に入れた。しかし、それがもとで兄の怒りを買って、彼は母の親元メソポタミアのラバンのもとへ逃げなければならず、短期の滞在のつもりが、何と二十年もおじラバンのもとで苦勞しなければならなかった。(31:41)人をだました者が今度はだまされる者となり、理不尽な扱いを受ける者となった。そしてついに父イサクのもとに戻る時が来るが、あのヤボクの渡しでの神との格闘により、ももの関節を打たれ、足を引きずる者となり、兄エサウとの和解に神経をすり減らし、次には娘ディナのことから息子たちがシェケムの住民を皆殺しにするという恐ろしい事件を起こし、さらに最愛の妻ラケルを道中で亡くし、母リベカの死に目にも会えず、ついには年寄り子で最愛の息子ヨセフまでも取られてしまい、このように彼の人生の後半は苦しみと悲しみに色取られたものとなってしまっていた。しかし、そのような彼の人生を終始守り、導いておられたのは主なる神であった。

彼の人生はアブラハムの生涯とも違い、イサクの生涯とも違い、波乱万丈で多くの苦しみと悲しみを経験しなければならなかったが、神はこのヤコブを世に生まれてくる前から選んでおられ、彼によって生まれた十二人の息子たちからイスラエルの十二部族が始まり、エジプトに下ってそこで四百年以上の滞在中に増え広がり、ついにイスラエル民族、国家としての歩みをする事となるのである。そして神はこのイスラエル民族の歴史を通して働かれ、ご自身を示され、ついに救い主イエス・キリストのご降誕へと至るのである。

ヤコブはヨセフと会えたので、「もう今、私は死んでもよい」と言ったが、神の御子イエス・キリストは罪の中に死に、闇の中に座り、倒れこんでいた私たちを救うために実際に十字架にかかれて死んでくださったのである。私たちは神を知らず、自己中心に生きてきた自分の罪のために神のさばきを受け、滅びに行くべき者であったのに、イエス・キリストはそんな私たちを愛して下さり、身代わりとして死んでくださったのである。そして誰でもこのお方を救い主として信じ受け入れる者は救われ、神のものとされ、ヤコブのために用意されたエジプトの宝にもまさる神の祝福、永遠のいのちをいただくことができるのである。神はそのひとり子イエス・キリストを私たちのために十字架につけるほどに愛していてくださる。

(ヨハネ3:16、Ⅰヨハネ4:9) それはヤコブのヨセフに対する愛よりも深く広く大きいものである。それゆえ、私たちもこの神の愛にこたえて、神のもとへ行き、喜びと感謝と祈りをもって従っていく者となろう。